研究の概要

＜研究主題＞

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」

―各教科等における見方・考え方を働かせて―

１　主題設定の理由

（１）　背景及び今日的動向から

今日において情報化やグローバル化の進展，人工知能（AI）等の技術革新による飛躍的な進化により急激な社会的変化が見られる。そのため，次代を担う子ども達には、様々な変化に主体的に関わり，自分なりに試行錯誤したり，多様な他者と協働したりして「課題を自ら見出し解決する力」「論理的に考えたり他者に分かりやすく表現したりする力」「知識・技能の更新のために生涯にわたって学習する力」等，変化の激しい社会に対応するための汎用的な能力が求められている。学校教育において，これまでの生涯にわたる①確かな学力　②豊かな人間性　③健康・体力の「生きる力」を育むとともに，学校と社会が連携・協働しながら未来の創り手となる子ども達に必要なこれからの新しい時代に求められる資質・能力を育成していく必要がある。そのため，学習指導要領を教育活動として着実に実施・具現化すると共に，令和の日本型学校教育に求められる ICT 等を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指して教師の資質・指導力を向上させる校内研究の充実を図ることが重要である。

（２）学校教育目標の具現化から

本校では，知育・徳育・体育のバランスのとれた教育活動の具現化とそれを身に付けた児童の育成を目指し，学校教育目標を「夢や目標をもち　学び合い　つながり合い　主体的に未来を拓く児童の育成―かしこく　やさしく　たくましく―」としている。この目標を具現化するにあたり，まず「知」の更なる質的転換を図り，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりを教育活動の柱として教育研究を推進していく。目的や相手意識，学習課題を明確にし，問題解決，探究的な学習に向けて自力解決や協働的な学びの場面をつくることで，児童が主体的に学習に取り組み，課題解決に向けて子ども同士の多くの関わりを生むことができ，思考・表現が磨かれる。また，日々，各教科等において言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を身に付け，それぞれの資質・能力を他教科等と横断的に育成することでその力が様々な生活場面にも派生していくと考えている。そして，これらの過程における教師の適切な指導性により，課題解決に向かうための思考力・判断力・表現力を高め，その土台となる基礎・基本を子ども一人一人に身に付けることで、目標の達成につながるものと捉えている。なお，研究の中心は「知」であるが，部会を組織して「徳」（道徳教育・人権教育等の豊かな心づくり），「体」（望ましい生活習慣や体力・運動能力づくり）にも取り組み，総合的な学校教育目標の具現化と実現を目指していくこととしている。

（３）これまでの研究経過から

本校は，平成２２年度から平成３０年度までの９年間，高知県教育委員会指定「教育課程拠点校」として，国語科を中心に研究実践を重ねてきた。その研究実践の積み上げを基に，令和元年度から，２年間の国立教育政策研究所教育課程指定校事業（国語科）研究指定校を受け，学習指

導要領の趣旨を生かした国語科の学習指導に関する研究を推進し，資質・能力ベイスの授業改善を進めてきた。

令和３年度からは，これまでの研究実践を継承・発展させながら「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクトにおける実践研究協働校事業として，中村中学校と共に小中学校の 9 年間の学びをつなぐ資質・能力を育む授業づくりの実現に向けた研究実践に取り組んでいる。本事業において今年度は，社会科，外国語科の授業づくりを進めていくが，一昨年度の国語科と算数科については，引き続き研究教科とし，また，昨年度の体育科と理科においても研究の成果を生かして「主体的・対話的で深い学び」へとつながる授業づくりを目指し，各教科等における見方・考え方を働かせる学習活動や児童の姿を明確にした授業改善に努めていく。

（４）児童の実態から

令和４年度の全国学力・学習状況調査及び高知県学力定着状況調査において，国語・算数・理科の３教科とも全国平均を上回る等，学力向上の取組成果が見られる。しかし，1 月実施の標準学力調査においては，３年国語，６年算数で全国平均を下回った。また，評定 1 児童の割合の目標値を下回る教科や学年もみられる。

昨年度の各種学力調査結果から，国語科では，物語文や説明文の大体を読むことや情報と情報の関係を捉えて読み取ることなどに弱さがある。また，算数科においては，数量の相対関係や意味理解，図や式と関連付けて説明することに弱さが見られる。また，一つの資料の精査・解釈及び複数の資料を関連付けて読むことは両教科に共通した課題である。実際の授業では，児童の日常場面や身近な場面，他教科と関連させた課題設定，児童から課題や問いを生み出し，解決していく単元構想，導入や展開を工夫することで主体的に取り組む児童の姿が多く見られるようになってきた。その一方で，自らの学びを自覚したり，深めたりする対話までには至っていない。また，自分の考えを記述したり，根拠をもとに説明したりすることに課題のある児童や，受動的で，自分一人でやり切る力に課題のある児童も依然として見られ，学力差もある。学年間で共通理解を図りながら、確実な学力の向上と低学年からの学習の積み上げをしていく必要がある。

以上のような背景や本校児童の実態から，研究主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり―各教科等における見方・考え方を働かせて―」としている。「主体的・対話的で深い学び」については，問題解決に向けて，習得した知識・技能を活用し，他者と関わりながら自己の学びを自覚し，新たに自分の考えや思いをもとに創造していく主体的・協働的に学び合う活動と捉えている。学習指導要領の趣旨を生かした学習指導において，教科等の見方・考え方を働かせる学習指導となるよう，指導過程や指導方法，発問の工夫，ICT の効果的な活用等，教師の指導性を適切に発揮することで学びや課題に挑戦する意欲を喚起し，子ども同士の関わり合いの質，学びの質，資質・能力の質を高めていきたい。

２　研究仮説

【仮説１】身に付けさせたい資質・能力を明確にし，「やってみたい」「考えてみたい」という学習課題を設定するとともに，振り返りを工夫し児童の学び（自己の変容）を自覚させ，日常生活や他教科等の学習につなげていくことで主体的に取り組むようになるだろう。

【仮説２】系統性を踏まえた学び方を的確に指導し，問題解決の場面をつくり，自分の考えとその理由や根拠を話し合わせて，友達の考えと比較させたり，図表，言葉を関連付けたりする等，対話的な学びを通して自分の考えを広げ深めることができるようになるだろう。

【仮説３】対話的な学びや「見方・考え方」を働かせた学びを通して，多様な考えや質の高い考えにふれ，自分の考えが変容したことに気付かせることで，学びの深まりを実感することができるようになるだろう。

３　研究内容

（１）　身に付けさせたい資質・能力の明確化と例えば国語科においては有効な言語活動及び算数科においては数学的活動の設定等，評価規準・評価方法の明確化

・児童の実態や９年間を見通して「身に付けさせたい資質・能力」を明確にし，その力を育成するための言語活動や数学的な活動が有効であるかを吟味して設定する。
・これまでの研究成果を基に，児童の必要感や切実さを引き出し，主体的に学びを進めていくための目的（必然性）や相手・場面設定の見直しを図る。
・例えば国語科や算数科においては，設定した言語活動や数学的活動を実践し，何がどこまできていたら「B」とするのか評価規準を設定する。また，単元のどこで（時間），何を（指導事項），何で（ノート，ワークシート等）評価するのか明確にする。

（２）　各教科等の「見方・考え方」を働かせた学習過程の研究

・国語科においては，目的や課題に応じて言葉の意味や働きに着目して，捉えたり問い直したりするなど，思考し表現している児童の姿を明確にし，学習過程や言語活動を工夫する。
・算数科においては，事象を数量や図形及びそれらの関係などの概念等に着目して捉え，根拠をもとに筋道を立てて統合・発展的に思考し表現している児童の姿を明確にし、学習過程や数学的活動を工夫する。
・体育科，理科，社会科，外国語科及び他教科等においても，国語科・算数科に倣って，見方・考え方を働かせた学習過程や学習活動を工夫する。

（３）　「授業改革ハンドブック」をもとにした授業の質的改善の研究

・学びの基礎を支える学習規律・学び方を徹底する。
・めあてに呼応した振り返りの視点を示し，児童自身が学びの成果や変容を実感することで意欲や他の場面で活用していこうとする学びのつながりを持たせる。
・ゆさぶりの発問を用意するなど，思考力・判断力・表現力を高める発問を工夫する。
・「問い返しのある学び合いにする言葉」「考え，深めるための技法（思考スキル)」を効果的に活用し，目的のある対話の充実を図る。
・児童の思考の流れに沿った構造的な板書になるよう工夫する。

（４）　国語科・算数科で付けたい力と他教科等との関連を図るカリキュラム・マネジメント表の活用

・国語科・算数科を重点教科としての社会科・理科・生活科・総合的な学習の時間・特別活動及び学校行事等，他教科等との関連を図りながら，既習の内容や経験を結び付けた身に付けた力を活用したりして，効果的に学習活動を行う。
・国語科・算数科で付けた力と他教科等での学びを繋げて活用・発揮することができているか，より効果的な関連付けを図るために，カリキュラム・マネジメント表を見直し、修正を行う。

（５）１人１台端末のタブレットを活用した授業づくりの推進

・各教科等でタブレットを活用する場面を設定し，効果的な ICT 活用につながる授業づくりを進める。
・教員研修を実施し，タブレット活用のスキル向上と効果的な活用の仕方の情報共有を図る。

４　基盤となる取組事項

（１）基礎・基本の定着を図る指導の徹底

・帯タイムを国語と算数を隔週で行い，モジュール学習として授業扱いすると共に,必要に応じて定期的に確認テストを実施する等として，児童の実態を把握しながら習得（知識・技能）と活用（思考力・判断力・表現力）の学力の定着と向上，ICT 活用能力の育成・伸長を図る。
・朝の会に「音読」を取り入れ，継続して行うことで読む力の基礎を育てる。
・「学びの教室」（放課後　火・木１６：００～１６：４０）では，外部支援員も含め全教員で取り組み，基礎的な学力の底上げを行う。

（２）ノート指導の充実と徹底

・各学年の系統性を考慮した「学びのノート〇箇条」を意識して思考の過程が分かるノート作りをし，児童同士見合う場を設定することで，自分のノート作りの参考にさせる。
・教職員も定期的にノート交流を行い，検証→改善を図りながら指導力を高める。

（３）言語環境の工夫・充実

・学校図書館の活用を意図的・計画的に実践するとともに，図書資料や新聞，その他様々な情報の中から，児童自身が必要な情報を整理しながら適切に表現する力を身に付けていくために環境を整えていく。
・教師自身が適切な言葉を意識して言語力を磨いていく。また，板書交流を行うことで，教職員同士学び合える環境づくりを行う。
・身に付けさせたい資質・能力を目指して設定した言語活動を反映させた作品を掲示し，他学年の児童も観る機会を設けたり，教職員で学び合ったりすることで工夫・改善を図る。

（４）家庭学習の習慣化

・「家庭学習カード」を全校で統一し，家庭学習の手引きを活用して、習慣化を図る。
・系統的に目指す家庭学習時間を設定し，月毎に検証し実態を把握する。
・自主学習の内容の充実を図るため，「自主学習の仕方」を学年毎に活用しながら、質的向上を目指す。
・授業のねらいと関連した予習を家庭学習にし，授業の中で意図的に指名，評価を行い児童の意欲化を図る。

（５）校内研修の充実

・校内研修年間計画に基づいて研究授業を計画的に実施し，必要に応じて外部講師を効果的に招聘し，研究の充実を図る。
・校内研究に関わるアンケートを年２回実施し，研究の方向性を検証し改善する。
・明らかになった成果と課題を次の授業に生かせるよう研究通信を発行し，研究の拡充を図る。
・「授業評価（リフレクションを含む）」を活用して，授業者だけでなく参観者も研究授業を振り返り，具体的に改善の方向や方策を明らかにした授業改善サイクルを確立する。

（６）授業力の向上を目指した組織的なＯＪＴの実施

・授業の流れが分かる最終板書を写真に撮り，ボードに掲示し教職員全員で見合い，付箋を使って交流する中で，明らかになったことを授業改善に生かす。
・各種学力調査の結果分析等を行い，児童の学力課題を明確にして，これから身に付けさせなければならない資質・能力に向けて対策を講じていく。

5　研究方法

○一人年間２回公開授業

・研究主題に沿って教材を研究し，全教職員で研修を深める研究授業においては学習指導案（年間１回）を作成する。ブロックまたは学年で授業を見合って，授業改善に生かしていく見て見て授業については「授業構想シート」または，学習指導略案を作成する。

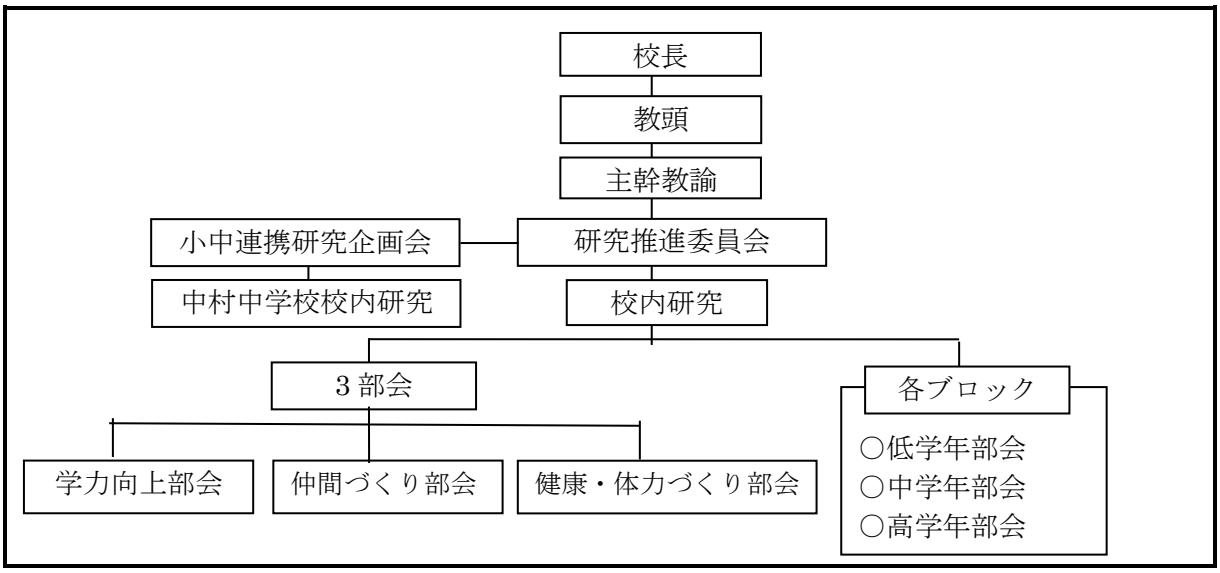
・授業後は，「身に付けさせたい資質・能力」をその授業を通して身に付けることができたのかを中心に据え，そのための視点を明確にして研究協議を行う。

○小中連携した校内研修

・月１回程度，研究企画会をもち両校の校内研究の推進状況を情報交換し，共通理解を図る。

・年間３回の小中合同研修会や小中の学習指導案検討会・授業研究会等に参加し，各教科等における９年間の学びをつなぐ系統性及び取組を共有する。

○実践協働校の視察

・実践協働校の教材研究会及び授業研究会に参加し，学んだことを共有し自校の研究実践に活かすようにする。

6 研究組織